

# 一般高年者のソーシャルネットワークと 地域特性との関連に関する研究

ソーシャルネットワークの地域特性別分析の試み

石川 久 展\*    冷水   豊\*\*    山口 麻 衣\*\*\*

## 抄 録

本研究の目的は、C市における高年者のソーシャルネットワークと地域特性との関連を検討することである。調査対象者は、C市在住の810人の健康な60歳から74歳までの高年者であり、訪問面接法を用いて2003年11月から12月にかけて調査を実施した。ソーシャルネットワークは大きさと交流頻度で測定し、地域特性は、地域の特徴を踏まえて農村地域、旧住宅地域、新興住宅地域、農村・新興住宅混合地域の4つに分類した。地域特性を独立変数、ソーシャルネットワークを従属変数として一元配置の分散分析を行った結果、農村地域と旧住宅地域のネットワークが有意に豊かであり、それに比べて新興住宅地と混合地域のネットワークがそれほど豊かでないこと、また混合地域は高齢者ケアに対する意識や態度が他の地域に比べて低いことが明らかになった。これらの結果から、今後は、地域特性を踏まえた上で、高齢者ケアのうちのインフォーマルなケアの基盤となるコミュニティ作りが必要であることが示唆された。

Key words：ソーシャルネットワーク，インフォーマルケア，高年者，地域特性

## ．はじめに

2000年4月にスタートした介護保険制度は、今年度で7年目を迎えている。2006年4月には、介護予防重視の方向が打ち出され、それに基づき介護保険制度の大幅な改正がなされた。この間の介

護保険制度の歴史を振り返ると、介護保険サービス利用者総数は、2倍以上に増加し、介護保険サービスの総量は、飛躍的に拡大している。また、介護保険制度そのものが国民の間に広く認知されるようになり、意識レベルにおいては、介護の社会化がかなり進んだと評価することができる。しかし、その一方では、介護保険に関わる利用者の経済的費用の増大、事業所によるサービスの囲い込み、事業所の様々な不正、深刻な介護労働不足の問題など、様々な問題や課題も明らかになってきた。

現行の介護保険制度では、入浴・排泄・食事介

\* Ishikawa, Hisanori

ルーテル学院大学

\* Shimizu, Yutaka

上智大学

\* Yamaguchi, Mai

宇都宮短期大学

助を中心とした介護ニーズに焦点を置いたサービス提供がされており、介護サービスだけでは要介護高齢者本人やその家族の介護ニーズ以外の様々な生活ニーズを充足することができない。介護ニーズ以外のニーズについては、家族や親戚が取り組むべき課題であろうが、現実的には、少子化や家族機能の低下など様々な理由から、わが国の家族介護機能は弱体化しており、すべての要介護高齢者が家族や親戚からそれらのニーズにあった支援を受けることができるわけではない。最近では、要介護高齢者本人と本人を見守る家族を支援する地域住民、近隣住民、ボランティアなどを中心としたインフォーマルなケアネットワークを、地域レベルにおいて新たに形成していくことが求められつつある<sup>(1)</sup>。今後は、基礎自治体である市区町村、さらには住民により身近な小地域レベルにおいて、介護保険サービスなどのフォーマルケアと、家族・親戚、友人・知人、近隣、ボランティアなどのインフォーマルケアを適切に組み合わせることが介護問題の解決策の一つとなるであろう（冷水ら 2005）。

近年、これらのインフォーマルケアの拡充の必要性が叫ばれる中、実践レベルでは各市町村社会福祉協議会単位で小地域ネットワーク活動やふれあい・いきいきサロンなどの取り組みがなされているが、それらの推進に必要なインフォーマルケア関連の調査研究は、社会福祉研究領域においては、あまりなされていないのが現状である。地域におけるインフォーマルケアの可能性の研究については、社会学など他の研究領域でいくつかみられる程度である（相川 2000；小川 1996）。それらの先行研究では、地域における高齢者介護の可能性を地域の家族・親戚、友人・知人、近隣によるソーシャルネットワークの観点から検討している。なお、最近では、地域社会における住民同士の結びつきという視点から、ソーシャルネットワーク以外に、ソーシャルキャピタルという概念が用いられてつつあるが（野口 2005；佐藤 2004）、具体的に測定可能な形に操作化されているわけではなく、現状では、まだ概念整理の段階であるといえる。

ソーシャルネットワーク研究は、主として欧米で発展してきたインフォーマルな対人関係の構造面に焦点をおいた研究テーマであり（Antonucci 1990；Cohen & Syme 1985）、わが国でも 1980 年代から今日まで、社会学、老年社会学などの領域でソーシャルネットワークに関する数多くの実証研究が行われている（澤岡ら 2006；小林ら 2005；原田ら 2003；野口 1991；玉野 1990；玉野ら 1989；西下 1987）。一方、社会福祉分野では、ソーシャルネットワークよりも、どちらかという対人関係の機能的側面を評価するソーシャルサポートに焦点をあてた研究が行われており、ソーシャルネットワークに関する実証研究報告は非常に限られている<sup>(2)</sup>。これからは、深刻化する介護問題に対して地域社会で取り組む必要があり、そのためには地域において住民同士のつながりや結びつきの状況やその特徴を把握・検討することが求められる。そして、今後は、家族・親戚、友人・知人、近隣の人間関係を測定するネットワークの実証研究は、インフォーマルケアを推進するためには不可欠なものとなるであろう。また、インフォーマルなネットワークは、それらの住民が住む地域の特性によって異なることが予測されるが、これまでのネットワークに関する実証研究は、調査対象のエリアが市町村レベルと、比較的大きなエリアを対象としており、さらに市町村の中の小地域を分析対象としたネットワークの実証研究はあまりなされていない。今後、インフォーマルケアを推進していくためには、地域特性を踏まえた上での小地域単位のネットワークに関する基礎的なデータの蓄積は、不可欠であろう。

以上のような背景を踏まえ、本研究では、ある農村地域在住の健康な一般高年者を研究対象とし、各地域の人間関係やインフォーマルケアに対する態度などの地域特性を踏まえながら、各地域により高年者のソーシャルネットワークにどのような特徴があるのかを把握することを目的とする。

## ．方 法

### 1．調査対象者と調査方法

本研究の調査対象地は、N県C市（2004年4月現在、人口約5万6千人、高齢化率19.6%）である。C市は、N県の中部東寄りにあり、古くは宿場町として栄え、1955年の合併によりC町が誕生、1958年に市制が施行された。2004年4月現在、人口は約5万6千人である。かつては農業、養蚕業、寒天業などの1次産業が中心であったが、近年は精密機械などの第2次産業さらには第3次産業が拡大しつつある。工場誘致や宅地開発などの施策により、ここ数年、人口が微増中であり、農村部から都市化が進んでいる地域である。本研究では、C市在住の60歳から74歳までの在宅高年者を対象とした。C市の協力を得て、住民基本台帳から二段無作為抽出を行い、1059名の標本を抽出した。なお、要介護度1から5までの要介護高年者は、本研究の調査対象から除くこととした。1059名の調査対象者に対して、訪問面接法（一部留め置き）を用いてアンケート調査を実施した。有効回答数は、810名であり、回収率は76.5%であった。調査期間は、2003年11月から12月である。

### 2．分析項目

#### 1）地域特性

本研究では、地域特性別による分析を試みるが、C市の地域特性とその地域特性をどのように分類したかを簡単に説明する。C市の地域特性の分類については、C市全域を熟知している社会福祉協議会の職員及びC市の介護保険課職員の2人に対してヒアリングを行い、最小の地域行政単位である行政区をもとに、調査対象地となったすべての行政区の特性を検討し、その地域特性による分類を試みた。その結果、農村地域、旧住宅地域、新興住宅地域、農村・住宅混合地域の4つに分類することとなった。農村地域は、古くからの農家が多い地域であり、そのほとんどがC市の山間地部分にあたる。伝統的な農村社会が残存する地域といえる。旧住宅地区は、C市の交通の

拠点となるJR線のC駅とその周辺の商業地域が中心である。これらの地域は、戦前から住宅地域として栄えていたところである。新興住宅地域は、いずれも山間地にあるが、戦後の大規模な住宅開発によって開かれた住宅地域である。この地域の住民はC市に長年住み続けてきた人ではなく、多くは他市から流入してきた人々である。最後の農村・住宅混合地域は、調査対象となった行政区の中で、古くからの農村地域と住宅開発された新興住宅地域の両方が混在している地域である。本研究では、これらの4つの地域特性別にネットワーク分析を試みることにする。

#### 2）ソーシャルネットワーク

ソーシャルネットワークの測定尺度についてであるが、ソーシャルネットワークは、地域社会にある家族・親戚、友人・知人、隣人などインフォーマルな対人関係の構造を表すものである。Barnes（1954）やBott（1971）によって始められたとされるネットワークの実証研究は、BerkmanとSyme（1979）やCohenとSyme（1985）らの研究を契機にさらに広がりを見せ、それ以後、数多くの実証研究がなされている。O'Reilly（1988）によると、ソーシャルネットワークの構成要素には、次の2種類がある。1つは、構造的要素（structural component）であり、もう1つは相互作用的要素（interactional component）である。構造的な要素には、関係、サイズ、密度、近接性などの下位尺度が含まれ、相互作用的な要素には、持続性、交流頻度、強度などが含まれ、O'Reilly（1988）は、ソーシャルネットワーク研究においては、これらの7つの尺度項目が最も頻繁に使用されていると指摘している。

わが国の老年学分野におけるソーシャルネットワーク研究をみると、その初期には藤崎（1985）、西下（1987）、玉野ら（1990）、古谷野（1991）など様々な先行研究が報告されているが、ソーシャルネットワーク尺度については、社会関係に関する論文で頻繁に引用されている野口（1991）の研究報告が、他の研究におけるネットワーク尺度採

用の原点となっているようである。なお、最近の研究では、友人や近隣ネットワークに焦点をおいた研究報告がよくみられているが（澤岡ら 2006；小林ら 2005；浅川 2003；古谷野ら 1998），本研究においては、野口の尺度を参考にソーシャルネットワークをネットワークサイズと交流頻度の 2 つを下位尺度として採用することとした。ネットワークサイズと交流頻度は、いずれも 3 項目ずつで構成されている。ネットワークサイズについては、親しくしている親戚数、親しくしている近所の人数、近所の人以外で親しくしている知人・友人数の 3 項目について、「いない」から「10人以上」までの 6 件法で尋ねており、サイズが大きくなるほど得点が高くなっている。交流頻度についても親しくしている親戚、親しくしている近所の人、近所の人以外で親しくしている知人・友人との交流頻度について、「年 1 回～数回程度」から「ほぼ毎日」までの 5 件法で測定し、交流頻度があるほど高得点としている。それらの合計得点をそれぞれネットワークサイズ得点と交流頻度得点とした。

### 3) その他の変数

その他の変数としては、地域別に高齢者ケアに対する意識や態度を明らかにするために、介護サービス、家事援助サービス、住宅サービス、施設サービス等の公的サービスに対する選好度、4 つの公的サービスの利用意向、地域における高齢者への声かけ、行政区での関わり、ボランティア活動などの地域活動への参加意向、そして実際のボランティア活動や地域活動の有無等の変数を用いた。基本属性関連の項目には、年齢、学歴、婚姻状態、職業の有無、配偶者の有無などがある。

### 3. 分析方法

分析方法については、地域別に高齢者ケアに対する意識や態度を明らかにするために、地域特性を独立変数、高齢者ケアの意識や態度の各項目を従属変数とし、クロス集計を行った。統計的有意差の検定には、<sup>2</sup> 検定を用いた。また、各基本属性項目や地域特性とソーシャルネットワークの関

連を検討するために、一元配置の分散分析を用いた。最後に、ネットワークと高齢者ケアの意識との関連を分析するために相関関係を検討した。なお、分析には、統計ソフト SPSS15.0 for Windows を用いた。

## . 結 果

### 1. 単純集計の結果

調査対象者の基本属性は、表 1 の通りである。対象者の男女比は、男性 48.9%，女性 51.1% とほぼ半数であった。年齢は、最低が 60 歳，最高が 74 歳，平均年齢は 66.7 歳であった。年齢階層別には、表 1 のように 60 歳から 64 歳までが 36.2% と最も多く、65 歳から 69 歳と 70 歳から 74 歳までは、それぞれ 31.9%，32.0% とほぼ同率であった。学歴別には、高卒が 6 割近くと最も多く、一方、大卒はわずか 6.2% であった。対象者のほとんどが高卒以下であり、大卒以上の高学歴の高年者はそれほど多くはなかった。配偶者がいる高年者は 8 割以上であり、

表 1 調査対象者の基本属性

性別	男性	48.9% ( 396 )
	女性	51.1% ( 414 )
年齢階層 ( 平均年齢 66.7 歳 )	60 歳～64 歳	36.2% ( 293 )
	65 歳～69 歳	31.9% ( 258 )
	70 歳～74 歳	32.0% ( 259 )
最終学歴	中卒	34.9% ( 281 )
	高卒等	58.9% ( 474 )
	大卒以上	6.2% ( 50 )
配偶者の有無	有り	83.6% ( 674 )
	無し	16.3% ( 132 )
婚姻状態	既婚	83.6% ( 674 )
	離婚	3.5% ( 28 )
	死別	11.3% ( 91 )
	未婚	1.6% ( 16 )
主観的健康観	非常に健康である	16.6% ( 134 )
	かなり健康である	28.1% ( 227 )
	どちらかといえば健康である	38.2% ( 309 )
	どちらかといえば健康ではない	9.9% ( 80 )
	あまり健康ではない	6.4% ( 52 )
地域特性	農村地域	29.6% ( 240 )
	旧住宅地域	35.9% ( 291 )
	新興住宅地域	24.4% ( 198 )
	農村・住宅混合地域	10.0% ( 81 )

% ( 度数 )



配偶者がいる人がほとんどであった。地域特性については、農村地域が30%、旧住宅地域が36%、新興住宅地域が25%、農村・住宅混合地域が10%であり、混合地域在住の高年者が他の地域と比べて少なかった。

次に、ソーシャルネットワークの単純集計の結果は、表2の通りである。ネットワークサイズの3項目については、全体的には回答が散らばっているのが特徴である。項目別にみると、親しい親戚数は「4から6名」が31.8%と最も多く、親しい近所の人数でも「4から6名」が23.2%と最も多かった。親しい友人・知人の数では、「10名以上」が28.0%と最も多く、親しい友人・知人の数が多いという結果であった。一方、「いない」をみると、親戚ネットワークがない人は4.2%と少ないが、親しい近所の人や友人・知人がいない高年者は、いずれも1割を超えており、友人・近隣ネットワークが無い人が少なからずいることがわかった。この結果については、ネットワークサイズの項目を得点化し、その平均得点をみてもわかる。親戚ネットワークの平均得点は3.88と最も高く、友人・知人が3.50、近隣が3.26と、親戚よりも低くなっている。これらの結果から、サイズについては親戚ネットワークが大きいことが示唆された。一方、交流頻度では、親戚との交流と友人・知人との交流は、「月に1～2回程度」がそれぞれ41.0%、

39.9%と最も多く、これに「年1回～数回程度」を加えると、どちらも6割を超えることになり、親戚や友人らとの交流がそれほど頻繁ではないことを示している。それに対して、近所との交流は、「週に2～3回程度」と「ほぼ毎日」が最も多く、2つを合わせると57%になる。親しい近所との交流が頻繁にあるという結果が得られた。そのことは、表2の交流頻度の平均得点が近所との交流が3.63と、他よりもかなり高いことからわかる。まとめると、C市在住の高年者のソーシャルネットワークは、親戚ネットワークは大きく、サイズのには最も小さい近所とのつきあいが深いという特徴があることがわかった。

## 2. 地域特性別にみた高年者ケアの意識や態度

高年者のソーシャルネットワークの特徴について検討する前に、4つの地域における高年者の高齢者ケアに対する意識や態度の特徴を明らかにし、地域特性と地域住民による高齢者ケアの可能性を検討してみたい。具体的には、排泄・入浴などの介護サービス、食事・買物などの家事援助サービス、ケア付き住宅やグループホームの利用、介護施設入所、などの4つの公的サービスの利用意向、さらに、高齢者に対するちょっとした声かけ活動、行政区への関わり、ボランティア活動への参加など、3つの高齢者ケアに対する態度の項目、の計

表2 ソーシャルネットワークの単純集計結果

%(度数)

サイズ	親 戚 数	近所の人数	友人・知人の数
いない	4.2% ( 34 )	12.5% ( 101 )	12.7% ( 102 )
1名	5.0% ( 40 )	7.8% ( 63 )	6.0% ( 48 )
2名	12.8% ( 103 )	13.3% ( 107 )	12.1% ( 97 )
3名	12.1% ( 98 )	17.7% ( 143 )	17.4% ( 140 )
4から6名	31.8% ( 256 )	23.2% ( 187 )	19.8% ( 159 )
7から9名	11.2% ( 90 )	7.2% ( 58 )	4.0% ( 32 )
10名以上	23.0% ( 185 )	18.2% ( 147 )	28.0% ( 225 )
平均得点	3.88	3.26	3.50
交流頻度	親戚との交流	近所との交流	友人・知人との交流
年に1回～数回程度	21.4% ( 165 )	2.3% ( 16 )	25.1% ( 176 )
月に1～2回程度	41.0% ( 316 )	17.3% ( 122 )	39.9% ( 280 )
週に1回程度	18.4% ( 142 )	22.7% ( 160 )	18.5% ( 130 )
週に2～3回程度	11.2% ( 86 )	30.2% ( 21 )	11.3% ( 79 )
ほぼ毎日	7.9% ( 61 )	27.5% ( 194 )	5.1% ( 36 )
平均得点	2.43	3.63	2.31

7つの内容について、地域特性別に評価した。分析手法としてはクロス集計、検定には<sup>2</sup>検定を用いた。

地域特性別に高齢者ケアに対する意識や態度に関する項目を分析した全体の結果は、表3の通りである。<sup>2</sup>検定の結果、統計的な有意差がみられなかったのは、住民にとっても最も身近な行政区への関わりのみで、それ以外の6項目については、すべて有意な結果が得られた。地域特性別にみた4つの公的サービスの利用意向については、どの結果もほぼ同じような傾向を示しており、その典型的な結果として、入浴・排泄などの介護サービスの結果を表4の通りに示した。旧住宅地と新興住宅地の高年者は、「大いに利用したい」が最も多く、農村地域と混合地域の場合は、他の2地区ほど「大いに利用したい」が多くはなかった。特に、

農村地域は、他地域と比べて、「あまり利用したくない」や「全く利用したくない」が多いのが特徴である。高齢者に対する声かけや今後のボランティア活動については、旧住宅地域、農村地域、新興住宅地域の高年者が混合地域の高年者よりも、「よくかかわるようになると思う」が多く、混合地域の場合は、「少し関わる」あるいは「あまり関わらない」という消極的な回答が他地域よりも多かった。

以上、本研究対象となった高年者の高齢者ケアに対する意識や態度について、4つの地域特性別にみた結果をまとめると、農村地域では公的介護サービスの利用意向は高くはないが、住民同士で高齢者を支え合うという意識が他地域よりも高かった。旧住宅地域と新興住宅地域については、公的サービスの利用意向が高く、また住民同士の助け合いの意識も農村地域ほどではないが、それなりに高いのが特徴であった。混合地域は、農村部分と新興住宅部分が混ざっている地域であるが、公的サービスの利用意向及び高齢者ケアを支える意識の両方とも、積極的な意見と消極的な意見の両極に分かれる傾向がみられた。

表3 地域特性別にみた高齢者ケアの意識のクロス集計の結果

	カイ二乗検定の結果
ボランティア活動への参加	**
行政区への関わり	N. S.
高齢者への声かけ活動	***
家事援助サービスの利用	***
グループホーム・ケア付き住宅の利用	***
介護サービスの利用	**
介護施設への入所	**

注1) \*\*\* p<.001 \*\*p<.01 \*p<.05

2) N.S.はNot Significantで、統計的に有意差がなかったことを表す

### 3. ソーシャルネットワークの特徴

一般高年者のソーシャルネットワークの特徴の詳細を検討するために、4つの地域別に、性、年

表4 地域特性別にみた介護サービスの利用意向

%(度数)

	介護が必要な時の入浴・食事・排泄介護などの在宅サービス					合計
	大いに利用したい	少し利用したい	利用したいとも、したくないとも、いえない	あまり利用したくない	全く利用したくない	
農村地区	80 33.8%	67 28.3%	48 20.3%	37 15.6%	5 2.1%	237 100.0%
旧住宅地区	126 43.6%	82 28.4%	38 13.1%	38 13.1%	5 1.7%	289 100.0%
新興住宅地	86 43.9%	44 22.4%	39 19.9%	16 8.2%	11 5.6%	196 100.0%
農村・住宅混合地域	24 29.6%	34 42.0%	11 13.6%	10 12.3%	2 2.5%	81 100.0%
合計	316 39.4%	227 28.3%	136 16.9%	101 12.6%	23 2.9%	803 100.0%

年齢階層、学歴、婚姻状態、ボランティア経験、地域活動経験を独立変数、ネットワークサイズと交流頻度の平均得点を従属変数とし、一元配置の分散分析を行った。C市全体と4つの地域について、各独立変数におけるカテゴリー別の平均の差とその統計的検定の結果は、表5の通りである、

まず、C市全体でみると、つまり表5の「4地域全体」でみると、ネットワークサイズと交流頻度の両方に統計的に有意な結果が得られたのは、婚姻状態別、ボランティア経験別、地域活動別、地域特性別であった。ネットワークサイズに有意差がみられたのは、学歴別であり、交流頻度に有意な結果が得られたのは、性別、年齢別の結果であった。

これらの結果の中で、特徴的な傾向がみられたものをあげると、まず、地域特性別の結果があげられる。表5の通り、農村地域と旧住宅地域では、平均得点がそれぞれ11.2と11.1と高く、それに対して新興住宅地域や農村・住宅混合地域は、それ

ぞれ9.7と、農村地域や旧住宅地域よりも有意に低かった。これは、農村地域や旧住宅地域在住の高年者のネットワークサイズが有意に大きいことを示している。交流頻度については、農村、旧住宅地域、新興住宅地域がそれぞれ8.5、8.7、8.4と同程度の得点であり、農村・住宅混合住宅地域が7.6と他の地域に比べて有意に低かった。混合地域は、ネットワークサイズがより小さく、交流もより少ないという結果であった。

その他の特徴的な結果としては、この1年間の間に福祉関係のボランティア経験がある人や行政区や公民館の地域活動経験がある人と、ボランティア経験や地域活動経験が無い人とを比較すると、表5のように、ネットワークサイズではボランティアを「よくした」「少しした」と答えた高年者の平均得点が11.8であり、「全くしなかった」という人の10.4よりも有意に高いことが示された。地域活動経験でも「よくした」人が12.2、「全くしなかった」が9.6と有意な得点差がある。また、交流

表5 地域特性別にみた各属性のネットワーク得点の平均の差（一元配置分散分析の結果）

		市全体		農村地域		旧住宅地域		新興住宅地域		混合地域	
カテゴリー		サイズ	交流頻度	サイズ	交流頻度	サイズ	交流頻度	サイズ	交流頻度	サイズ	交流頻度
性	男 性	10.6	8.2 **	11.5	8.4	11.3	8.5	8.6 *	6.6 **	8.7 **	6.6 **
	女 性	10.7	8.7	11.0	8.6	11.0	8.9	10.8	8.3	10.8	8.3
年齢階層	60-64歳	10.5	8.2 *	11.3	8.2	11.0	8.3	8.9	7.3	8.9	7.2
	65-69歳	10.6	8.5	11.1	8.5	11.6	8.8	9.4	4.5	9.4	7.5
	70-74歳	10.9	8.8	11.3	8.8	10.9	9.0	10.9	8.0	10.9	8.0
学歴	中 卒	9.7 **	8.4	10.4	8.3	10.3 *	8.5	9.1	7.5	9.1	7.5
	高卒等	11.2	8.6	11.6	8.5	11.6	8.9	10.2	7.9	10.0	7.8
	大卒以上	10.8	8.5	12.2	8.8	10.5	8.1	8.5	5.7	8.5	5.7
婚姻状態	既 婚	10.9 **	8.3 **	11.4	8.3	11.4 *	8.6 *	9.7 *	7.2 **	9.7 **	7.2 *
	離 婚	8.5	9.7	14.5	12.0	18.0	7.0	6.8	8.0	7.8	8.0
	死 別	10.3	9.1	10.8	9.1	10.5	10.3	12.9	10.2	12.9	10.2
	未 婚	5.9	9.6	6.3	8.0	8.5	9.3	5.0	10.0	5.9	10.0
ボランティア経験	よくした	11.8 **	9.3 **	12.5	9.5	11.5	9.5	10.7	7.2	10.7	7.2
	少しした	11.5	8.4	11.6	8.3	12.7	8.9	8.0	7.0	8.0	7.0
	全くしなかった	10.4	8.4	11.0	8.4	10.9	8.6	9.8	7.7	9.8	7.7
地域活動経験	よくした	12.2 **	9.2 **	12.5 **	9.5 *	12.8 **	9.3 *	11.2	7.7	11.2	7.7
	少しした	11.3	8.2	11.6	8.3	11.4	8.6	9.3	7.3	9.3	7.3
	全くしなかった	9.6	8.3	11.0	8.4	10.4	8.5	9.3	7.6	9.3	7.6
地域特性	農村地域	11.2 **	8.5 **	-	-	-	-	-	-	-	-
	旧住宅地域	11.1	8.7	-	-	-	-	-	-	-	-
	新興住宅地域	9.7	8.4	-	-	-	-	-	-	-	-
	混合地域	9.7	7.6	-	-	-	-	-	-	-	-

注1) \*p<.05; \*\*p<.01.

2) 従属変数は、ネットワークのサイズと交流頻度の平均得点

頻度についてもサイズと同様の傾向がみられ、ボランティア経験と地域活動経験とも「よくした」高年者の方が「全くしなかった」高年者よりも有意に交流得点が高いことが確認できた。これらの結果は、社会参加活動がソーシャルネットワークに有意に関連していることを示唆している。また、婚姻状態をみると、「既婚」や「死別」のネットワークサイズの平均得点は、それぞれ10.9と10.3であり、「離婚」や「未婚」の8.5と7.9と比べて有意に高いが、逆に離婚者や未婚者の交流頻度は、既婚者や死別者よりも有意に多いという結果であった。ネットワークが小さい高年者については、交流が頻繁にあることにより、また逆にネットワークが大きい人は、人々との交流よりも、より多くの親しい人々がいることによって、ソーシャルネットワークが維持されている可能性がある。

次に、農村地域、旧住宅地域、新興住宅地域、混合住宅地域の4つの地域における属性別にネットワークの特徴を検討する。一元配置分散分析の結果、農村地域において有意な結果が得られたのは、地域活動別であり、「よくした」高年者の方がそれ以外のしなかった人よりもネットワークサイズと交流頻度の両方とも有意に高かった。旧住宅地域においても地域活動別にみると、農村地域とほぼ同じような結果がみられた。両地域ともC市に古くから住んでいる住民が多いところであり、これらの人々については、長年の地域活動と人々とのつながりが密接に関連していることがわかった。旧住宅地域、新興住宅地域、混合地域の3地域に

共通に有意差がみられたのは、婚姻状態別の結果であった。いずれも「死別」した高齢者のネットワークはサイズにおいても、頻度においても豊かであり、「未婚」者のネットワークは小さいが、人々との交流はあるという結果であった。その他の特徴的な結果としては、新興住宅地と混合地域の両地域において、ネットワークに性差があることがわかった。サイズ及び交流頻度とも、女性の方が有意に豊かであることが検証された。全体的には、4地域にデータを分け地域ごとに分析してみると、有意差がみられた項目は少なくなったが、地域ごとに特徴があり、特に混合地域においては高齢者ケアに対する人々の意識や態度が他の地域よりも希薄であることがわかった。

#### 4. ソーシャルネットワークと他変数との相関

最後に、ソーシャルネットワークと高年者のQOLやケアサービスの選好との関係を検討してみたい。分析手法としては、相関関係を用いたが、具体的にはソーシャルネットワークと、生活満足度、うつ傾向、インフォーマルケアとフォーマルケアの選好(以下、IC・FC選好とする)との相関(ピアソンの積率相関係数)を用いた。なお、IC・FC選好については、7件法で尋ねており、点数が高くなればなるほど、フォーマルケアの選好度が強いことになる。

結果は、表6の通り、ネットワークサイズについては、生活満足度、うつ傾向、介護、生活援助、相談、声かけの4つのIC・FC選好のいずれも有意

表6 ネットワークと他の変数間の相関係数(ピアソンの積率相関係数)

	ネットワークサイズ	交流頻度	生活満足度	うつ傾向	IC・FC選好(介護)	IC・FC選好(生活援助)	IC・FC選好(相談)	IC・FC選好(声かけ)
ネットワークサイズ	-							
交流頻度	0.301 ***	-						
生活満足度	0.359 ***	0.203 **	-					
うつ傾向	-0.236 ***	-0.032	-0.464 ***	-				
IC・FC選好(介護)	-0.119 **	-0.031	-0.115 **	0.076	-			
IC・FC選好(生活援助)	-0.140 ***	-0.020	-0.125 **	0.124 **	0.755 ***	-		
IC・FC選好(相談)	-0.127 ***	-0.019	-0.155 ***	0.124 **	0.609 ***	0.712 ***	-	
IC・FC選好(声かけ)	-0.180 ***	-0.048	-0.150 ***	0.142 ***	0.559 ***	0.693 ***	0.778 ***	-

\*\*\* p<.001 \*\*p<.01 \*p<.05



な相関があることが示された。特に、生活満足度とうつ傾向については、相関係数がそれぞれ0.301と-0.236と比較的高く、ネットワークサイズがQOLと有意に関連していることが示された。IC・FC選好については、いずれも負の相関を示しているが、これは、ネットワークサイズが大きいほど、友人・知人、ボランティアなどのインフォーマルケアを 선호する傾向にあることを表しており、IC・FC選好にネットワークサイズが関連することが示された。交流頻度については、生活満足度との関係のみ有意な結果が得られた。その他の興味深い結果としては、生活満足度とIC・FC選好との間に有意な相関がみられたことがある。満足度が高い人ほどフォーマルケアを 선호する傾向にあり、人々の生活満足度が将来の高齢者ケアサービスの選択にも影響する可能性があることが示唆された。

## ・考 察

### 1．結果のまとめと考察

最後に、これまでの分析結果をまとめると共に、それらの結果に考察を加えてみたい。

C市在住の高齢者のソーシャルネットワークの特徴をみると、単純集計の結果、親戚ネットワークのサイズは、他の友人・知人ネットワークや近隣ネットワークよりも大きいという結果であった。統計的な検定を行っていないので、結果を一般化することはできないが、藤崎（1985）はわが国の高齢者のネットワークは、友人より家族・親族関係が中心であると指摘しており、一部それを裏付ける結果となった。一方、ネットワークの交流頻度については、親しい近隣との交流が他の親戚、友人・知人との交流よりも盛んであることが確認された。高齢者の近隣ネットワークはサイズとしては、親戚や友人・知人ほど大きくはなくても、近隣との交流は密であり、C市の高齢者にとっては、近隣関係が重要であることが示唆された。なお、筆者は、農村地域である山口県東和町において、ソーシャルネットワークに関する同様の調査を実施したが、その中で高齢化率が非常に高い東和町

では、家族・親戚ネットワークよりも近隣ネットワークが豊かであることがわかったが（石川1997）、同様の結果を得ることができた。

地域特性別に高齢者ケアに対する意識や態度の結果をみると、項目によって多少の結果のばらつきはみられるものの、旧住宅地域と新興住宅地域の高齢者は、公的サービスの利用意向は他と比べて高く、混合地域の高齢者の場合、いずれの公的サービスについても利用意向が最も低かった。農村地域は、両者の中間の結果といえることができる。また、今後の高齢者ケアへの参加態度については、混合地域は、他の地域に比べてかなり意向が低かった。これらの結果から、全体としては、農村部であれ、住宅地・市街地であれ、公的サービスの利用やケアへの参加の意識については、比較的高いと考えられる。その一方で、古くからの農村部分と新興住宅地が地域の中で混ざっている混合地域は、現状では、高齢者ケアに対して消極的な姿勢がみられた。筆者たちは、C市でフィールド調査を行ったが、混合地域にあたる町を訪問し、調査をする機会を得ることができなかったため、混合地域の特性を十分に把握することはできなかった。従って、この結果の詳細な検討については、今後の課題である。なお、筆者たちがC市の別の新興住宅地を訪問したときに、その新興住宅地と近隣の農村部分との関係はなかなか難しいということを地域住民から聞いており、もしかすると、混合地域には、農村部と都市部の2つの間の異なる文化の軋轢がある程度存在しており、それが高齢者ケアへの消極的な参加態度に表れているのかもしれない。

地域特性別にソーシャルネットワークをみると、農村地域と旧住宅地域の方のネットワークがサイズでも交流頻度でも他の新興住宅や混合地域よりも有意に豊かであることが確認された。調査対象地となったC市の農村地域は、兼業農家が大半を占めるが、それでも家族互助や地域互助といった、わが国の伝統的な農村社会の特徴をある程度受け継いでいる地域である。一方、旧住宅地域は、C市の各交通手段の起点となっているC駅周辺にあり、

戦前からの住宅地である。C市は、非常に歴史のある町であり、住民たちの多くはこの地域に愛着をもち、何世代にもわたって住み続けている人も少なくはない。農村地域と旧住宅地域の両地域とも、地元出身者が非常に多く、古くから住み着いている人が多く、その長い歴史の中で人々が豊かなネットワークを築いてきたと考えることができる。新興住宅地域は、C市が戦後に開拓した大きな住宅地が存在し、他府県や他市からの移住者が多く、それが故に、家族・親族ネットワークは小さく、また近隣のネットワークを十分に構築できていないと推察することもできる。今後の政策的な課題としては、C市に長期間居住していなくて、ネットワークが十分ではない人にどのようにアプローチをすればよいのかということになるが、このことを検討するには、この1年間のボランティア経験や地域活動経験がソーシャルネットワークに有意に影響を与えているという調査結果が参考になる。ボランティア活動や地域活動をこの1年でよくした高年者の方がそうでない人々よりソーシャルネットワークが豊かである。これは、たとえば居住年数が長くなくても、様々な社会活動への参加を積極的に促すことで、ネットワークを拡大する可能性があることを示唆しており、今後、この地域においてボランティア活動や地域活動を活性化するプログラムの開発が必要であろう。

次に、4つの地域ごとにデータを分けて、各地域における属性別のソーシャルネットワークの特徴を検討してみたが、有意差が得られた結果は、それほど多くはなかった。農村地域と旧住宅地域では地域活動別のネットワークにおいて、農村地域、旧住宅地域、新興住宅地域では婚姻状態別のネットワークにおいて有意差がみられた。特に、未婚者の場合、ネットワークが極端に小さく、今後これらの未婚の高年者に対するケアネットワークの構築が政策課題となるかもしれない。また、混合地域においては、他地域と比べて特徴的な結果は得られなかったが、これまでの分析結果を踏まえると、混合地域のソーシャルネットワークの構築が最も重要な課題となることを示唆している。

混合地域には、同じ地域に農村部分と新興住宅地部分があって、その両地域の交流が難しい面があり、それが高年者のネットワーク状況にも影響を与えているとも考えられる。このような地域において、いかに両者の社会参加を促していくかが重要な課題となるであろう。

最後に、ソーシャルネットワークが生活満足度やうつ傾向などのQOLの項目と関連することは、数多くの先行研究でも検証されてきたことであるが(石川 2001)、本研究の結果でもネットワークと生活満足度やうつ傾向との間に有意な関係があるという同様の結果を得ることができた。また、相関関係の分析により、ソーシャルネットワークが高年者のインフォーマルケアとフォーマルケアの組み合わせ選好にも有意に関連していることが検証された。言い換えると、ネットワークは豊かな人はインフォーマルケアを選び、ネットワークが無い人はフォーマルケアを選ぶ傾向があることが明らかになった。この結果は、今後、個人を援助する中でフォーマルケアとインフォーマルケアの組み合わせを考える場合に、ネットワークが重要な検討事項の一つになることを示唆している。

## 2. 本研究の限界と今後の課題

ここで、本研究の限界と今後の課題を記しておきたい。まず、本研究では、地域特性を分析枠組みの重要な変数として用いたが、これに関する先行研究は非常に限られているために、今回は地域特性に詳しいと思われる行政職員と社会福祉協議会職員からの意見をもとに、試行的に地域特性の枠組みを作成した。その点では、あくまでも試みであるので、今後は、その妥当性について検討することが課題となる。

また、地域特性を分析するための分析枠組みの開発も今後は必要であろう。農村地域や住宅地域というような枠組みだけではなく、別の視点からの枠組みによる分析も必要である。今後は、このような小地域単位の分析枠組みを視野にいたした調査研究が他でも実施されることを期待したい。

最後に、本研究の最終的な目的は、インフォー

マルケアとフォーマルケアの適切な組み合わせを検討することである。本研究では、インフォーマルケア源となるソーシャルネットワークに焦点をあて、その視点から分析を進めてきた。しかし、本研究で採用した方法だけでは、インフォーマルケアの可能性を十分に検討することはできない。今後の課題としては、地域のインフォーマルケアの可能性について、他方法により多面的に検討すること、さらにはフォーマルケアとインフォーマルケアの適切な組み合わせを検討することがある。

## 注

- (1) 2006年4月からの改正介護保険制度により、介護予防が重視される中で、今後、地域における介護サービス以外の支援が一層必要になっている。そのためには、地域におけるインフォーマルなサポートネットワークとそれをベースにした支援が重要な課題であることは、地域福祉関連の様々な雑誌などで指摘されているところである。
- (2) 筆者が社会福祉関係の『社会福祉学』、『地域福祉学』、『地域福祉研究』、『社会福祉研究』、『ソーシャルワーク研究』などの学術雑誌に掲載された2001年から2006年までの約5年間の論文をレビューした限りでは、ソーシャルネットワークの実証研究論文は、渡辺(2005)の研究ノート1本のみであった。

## 参考文献

- 相川良彦(2000)『農村にみる高齢者介護 在宅介護の実態と地域福祉の展開』川島書店。
- Antonucci, T.C. (1990) Personal characteristics, social support, and social behavior. In Binstock, R. H. & Shanas, E(eds.) Handbook of aging and social sciences, 3rd edition, 205 - 226.
- 浅川達人(2003)『近隣と友人』古谷野亘・安藤孝敏編『新社会老年学；シニアライフのゆくえ』ワールドブランキング, 133-139。
- Barnes, J. A(1954) Class and Committees in a Norwegian Island Parish. Human Relations, 7, 39-58.
- Berkman, L.F. & Syme, S.L. (1979) Social Networks, Host Resistance and Mortality: A Nine-year Follow-up Study of Alameda County Residents, Americann Journal of Epidemiology 109 (2) , 186-204.
- Bott, E.(1971).Family and Social Network: Norms and External Relationships in Ordinary Urban Families'. Tavistock, London.
- Cohen, S. & Syme, S. L( eds. )Social Support and Health. Academic Press, Orland.
- 藤崎宏子(1985)『老年期の社会的ネットワーク』副田義也編『日本文化と老年世代』中央法規出版, 89・148。
- 原田謙, 浅川達人, 斉藤民, 小林江里香, 杉澤秀博(2003)『インナーシティにおける後期高齢者のパーソナルネットワークと社会階層』『老年社会科学』25(3), 291 - 304。
- 石川久展(1997)『高齢者の社会関係に関する研究 4 地域の高齢者の社会関係の比較研究及び社会関係と関連変数との関連分析』日本社会事業大学大学院博士論文。
- 石川久展・渋谷田鶴子(2001)『日系高齢者の社会関係と抑うつに関する研究 ロスアンゼルス在住の日系高齢者の社会関係と抑うつとの関連について』『テオロギア・ディアコニア』ルーテル学院大学社会福祉学科25周年記念論文集, 119 - 133。
- 小林江里香・杉原陽子・深谷太郎ほか(2005)『配偶者の有無と子どもとの距離が高齢者の友人・近隣ネットワークの構造・機能に及ぼす効果』『老年社会科学』26(4), 438 - 450。
- 古谷野 亘(1991)『社会的ネットワーク』『老年社会科学』13, 68 - 76。
- 古谷野亘・安藤孝敏・浅川達人ほか(1998)『地域老人の社会関係にみられる階層的補完』『老年社会科学』19(2), 140 - 149。
- Neugarten, B.L., Havighurst, R.J & Tobin, S.S.(1961) The measurement of life satisfaction. Journal of Gerontology, 16, 134-143.
- 野口裕二(199b)『高齢者のソーシャルネットワークとソーシャルサポート 友人・近隣・親戚関係の世帯類型別分析』『老年社会科学』13, 89・105。
- 野口定久(2005)『地域福祉の未来へのシナリオ - ソーシャルキャピタルの視点 (巻頭言)』『日本の地域福祉』19, 1・2。
- 西下彰俊(1985)『高齢女性の社会的ネットワーク 友人ネットワークを中心に』『社会老年学』26, 43 - 53。
- 小川全夫(1996)『地域の高齢化と福祉 高齢者のコミュニティ状況』恒星社厚生閣。
- O'Reilly, P. (1988) Methodological issues in social support and social network research, Social Sciecnas and Medicine, 26(8) 863-873.
- 佐藤彰俊(2004)『ソーシャルキャピタル』『月刊福祉』11月号, 86 - 89。
- 佐藤真一・長田由記子・矢富直美ほか(1989)『中・高齢者における生活の志向性と満足度』『老年社会科学』11, 116 - 133。
- 澤岡詩野, 福男健司, 浜田知久馬(2006)『都市高齢者のネットワークタイプによる友人との交流媒介とし

- ての携帯電話の利用状況』『老年社会科学』28(1), 12-20。
- 冷水豊・石川久展・山口麻衣・ほか(2005)『生活の質から見た高齢者に対するフォーマルケアとインフォーマルケアの組み合わせ地域モデル』平成15～17年度文部科学省科学研究費補助金(基盤研究(B))研究成果報告書, 上智大学。
- 玉野和志(1990)『団地居住老人の社会的ネットワーク』『社会老年学』32, 29-39。
- 玉野和志, 前田大作・野口裕二・中谷陽明・坂田周一・Jersey Liang(1989)『日本の高齢者の社会的ネットワークについて』『社会老年学』30, 27-36。
- 渡辺晴子(2005)『痴呆性高齢者のソーシャルサポートネットワーク』『地域福祉研究』33, 112-123。

## A STUDY ON RELATIONS BETWEEN SOCIAL NETWORKS AND AREA CHARACTERISTICS AMONG YOUNG-OLD PEOPLE :

A study of social networks in terms of four types of area characteristics

Ishikawa, Hisanori

The purpose of this study is to describe and clarify the characteristics of social networks in terms of four types of area characteristics among young-old people (aged 60 to 74) in C-city. A total of 810 face-to-face interviews were successfully completed from November through December, 2003.

A social network was measured by two kinds of items such as size and contact frequency. There were four types of area characteristics; rural area, old-town area, new-town area, and rural and new-town mixed area. One-way ANOVA was conducted to examine the relations between social networks and area characteristics among young-old people. The results of the one-way ANOVA showed significant differences in social network sizes by area characteristics, experience of social participation within one year, and marital status. In other words, older people in rural area and old-town area had larger social networks than other two areas. People in mixed area had less awareness toward informal care than other three areas. These results suggest that we should take into account of area characteristics when we try to build community for informal care.

**Key words:** Social networks, informal care, young-old, area characteristics